

ハードコア・レジェンド

プロレスとは、
六メートル四方の
舞台の上で行われる
ショーだ。



若き挑戦者、
金髪の貴公子・
ミッシェル！



194センチ！
122キロ！
残虐王・
タウンゼント！



舞台に上がる者は
全員が役者だ。
俺に与えられた
役は——残虐王。



だが俺は、
人を傷めつけるのが
好きなわけじゃない。

リングの上では、
こいつは敵だ。



こいつも、きつい
下積みを重ねて、
この舞台まで
上がってきたんだ。



だが俺たちは、
同じ会社に雇われた
同僚でもある。



タウンゼント、
得意の凶器攻撃だ!



血を流させるたび、
俺は恐怖する。
殺してしまわないかと。





取り返しのつかない
怪我をさせないか。
二度と戦えないほど、
怯えさせないか。



ミッシェル、
額から出血！



本当なら、
こんな仕事は
正気じゃない。



だけど俺たちは、
サラリーをもらう
プロだ。



今度は
パイプ椅子だ！



プロならば、
仕事を全うしなくちゃ
いけない。



観客が望むのは、
たった一つ。
刺激だ。



その上には
画鋲だ！



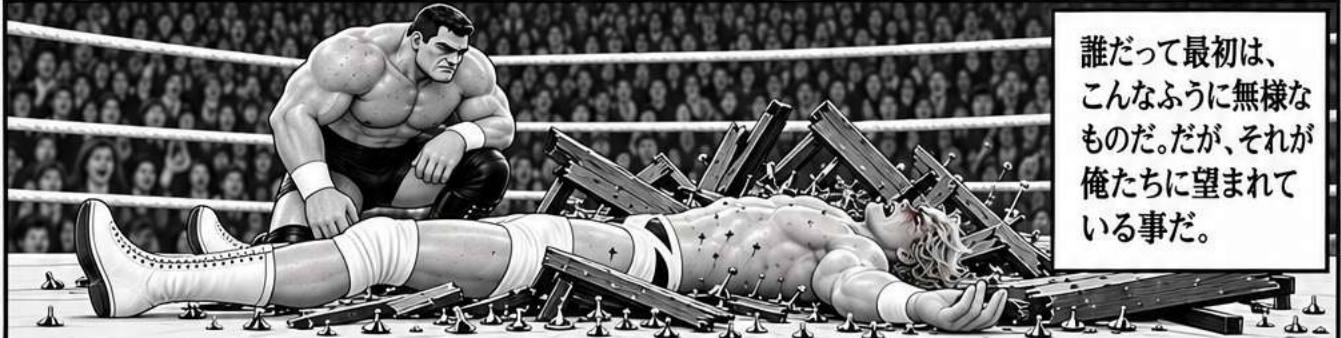
リングの上に
テーブルを
持ち込んだぞ！



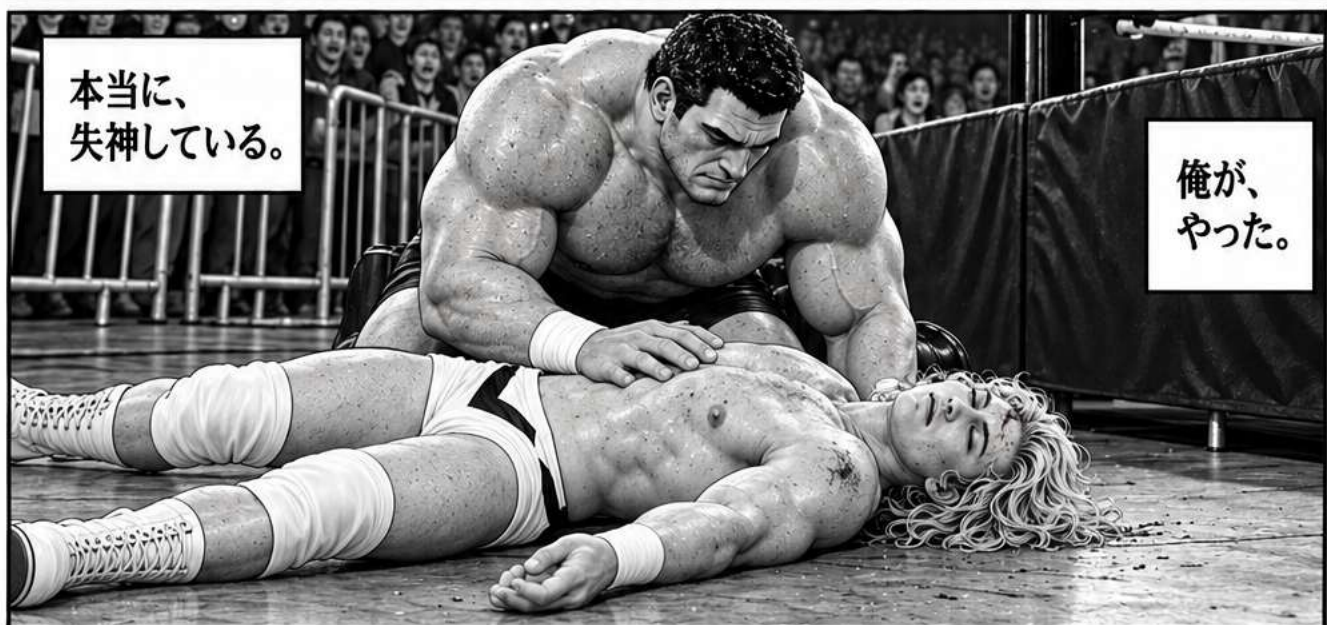
頼む。
きちんと受け身を
取ってくれ。



ドガッ



誰だって最初は、
こんなふうは無様な
ものだ。だが、それが
俺たちに望まれて
いる事だ。





リングへ戻した。
もう、終わらせなくては。



残虐王、
若き貴公子を
完全に破壊
しました！



ワン！
ツー！
スリー！



さらに噛み付きだ！
なんという男だ！



もう……
こんな事は
いやだ。

くそっ。
最低だ。



おい、大丈夫か？
もうスリーカウント
だぞ。起きろ。



素晴らしい
ショーだった！
配信は十万を
超えたぞ！



心配ない。
大した事は
ないぞ。
お前なら見れば
わかるだろう。



フレッド。
ミッシェルの
様子は？



あいつは
ハードコアを
やるタイプじゃ
ないだろう。

そうじゃない。
どうして俺と
やらせたんだ。



まだ二十歳
そこそこだ。
顔もいい。
才能もある。
その選手生命を、
どうして賭けさせる。



今回の
負けブックを
飲ませるのにも
苦勞した。



登竜門だよ。
最近、生意気な
口もきくように
なった。



ショーには
打ち合わせがある。
だが、痛みも事故も
本物だ。

負けブック。
あらかじめ
決まっている、
敗北の筋書きだ。

本日の対戦カード

- 1 前座マッチ
- 2 タッグマッチ
- 3 セミファイナル
- 4 メインイベント



これで潰れるなら、
それまでだ。
だが、これを機に
花開くかも
しれん。



あいつは本当に
失神してた！
俺には成功とは思えない。



そうだ。
さっきの試合は、
前座に過ぎない。

集中しろ。
今夜はもう一試合、
メインのカードが
ある。



187センチ！
94キロ！
ヘビー級王者、
テキサスの狂人
フレディ！



ドクター、トレーナー、
顔なじみのスタッフ。
俺たちは、この人たちに
支えられている。



対するは愛弟子、
タウンゼント！
今夜は師弟による
タイトル戦です！



歓声が、
洪水みたいに
押し寄せる。



俺は、
この瞬間が
大好きだ。



今この時だけは、
俺は最強の男だ。



向こうに、
フレディがいる。
六十を過ぎた、
皺だらけの男だ。



道場が家で、
師匠が父親だった。
しごきは、悪夢その
ものだったが。

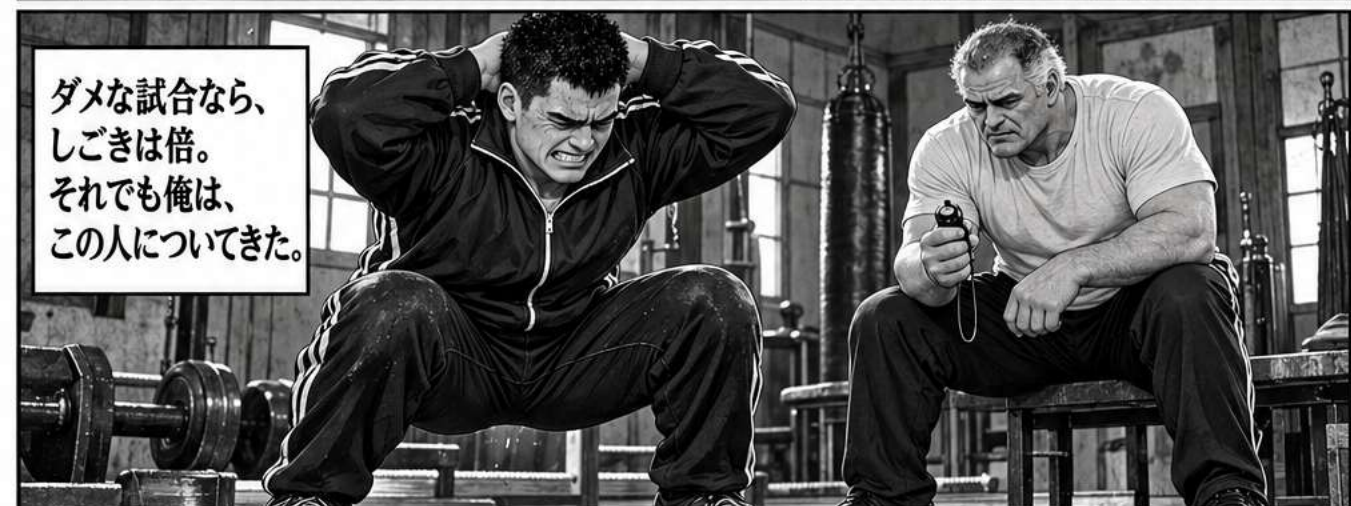


親に捨てられた
俺は、ボロいプロレス
道場で育った。



いい試合をすれば、
ステーキが食えた。

いい試合
だった。食え。



ダメな試合なら、
しごきは倍。
それでも俺は、
この人についてきた。



下積みを重ね、
二人そろって、
大きな団体と
契約した。



このガタイと、
人を食い殺しそうな顔。
師匠が、俺のギミックを
作った。



この人は四十年以上、
傷を負うたび立ち
上がってきた。

これが俺の
生き方だ。



この師弟対決のために、
何年も準備してきた。



十六で初めてリングに
上がってから二十年。
念願の夜が、来た。



さあ、
師弟対決が
始まった!



フレディ、
投げたのに
フォールへ
行かない!



俺たちは、
ただ相手を
フォールすればいい
レスラーじゃない。

会社も観客も、
この二人に
求めるのは血だ。



師匠は、俺が頑丈だと知っている。



有刺鉄線バットです！



ミッシェルの顔を潰した俺が、今度は同じ目に遭う。これで、あいつのファンも溜飲が下がる。



タウンゼント、顔面から出血！



まったく、見事なストーリーだ。さあ、今度はこっちの番だ。

最後は、
特製テーブルと炎。
締めくりまで
決まっている。

凶器は、
出す順番どおりに
並んでいる。



今度は
フレディが
叩きつけられた!



最高のショーになる。
そう思っていた。



その恐怖の顔は、
演技じゃない。



だが、事故は起こる。





どうした
フレディ!
目を押さえて
います!



血と汗で、
手元が狂った。



違う。
これは、
演技じゃない。



神様。
どうか、
無事でいてくれ。



右目をやった。
止めてくれ。



それでも俺は、
残虐王の顔を
崩せなかった。

試合は台無しだ。



フレッドには、
状況が伝わっている
はずだ。



……なぜだ。
なぜ、止めない。



首を横に振れば、
試合は止まる。



続行だ。あいつは、
このまま続けろと
言っている。



フレディ。
すぐ、終わらせよう。



ダメだ。

フィニッシュは、
テールを
使うんだろう。



この人の性分は、
誰より俺が知っている。
こうなったら、
死んでも引かない。



くそっ。
なんて男だ。



なら、俺に残された
選択肢は、一つだ。



俺は、
残虐王なんだ。



火まで放った!
やめろ、殺して
しまうぞ!



タウンゼントが、
テーブルを設置!



これが、俺たちの
決めたフィニッシュだ。



ここまでやれば、
この死闘は終わる。



だが、師匠の目を取り戻すには、
きつともう遅い。

もうすぐ終わる。

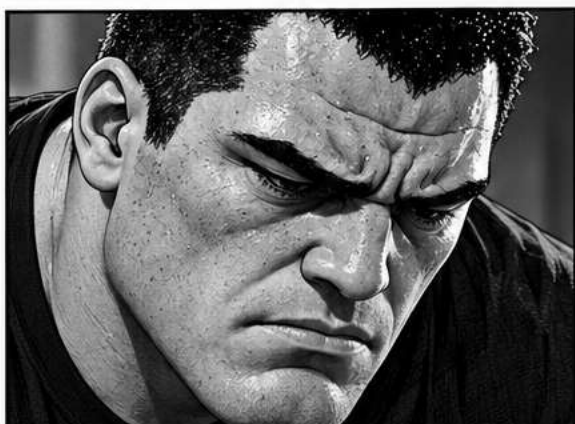


ああっ！
フレディが
逆襲ーッ！！





数日後。

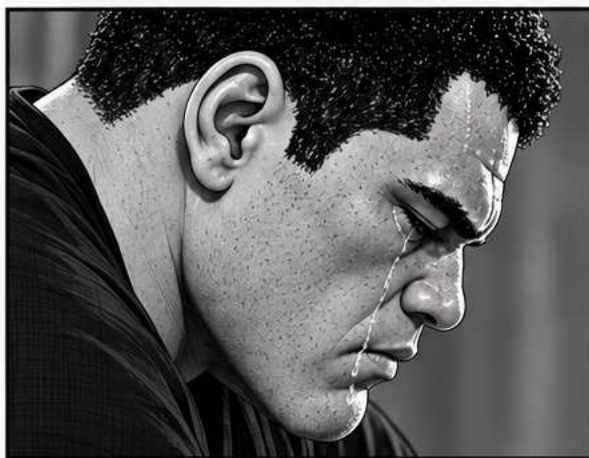


俺が、
この人の光を
奪った。



すまない、
フレディ。
俺のせいだ……。





二ヶ月後。

ツアーが迫っても、
リングに戻る気には
なれなかった。

六十を過ぎて、
片目で戦うなんて。
もう、引退するしか
ないじゃないか。

マネージャーの
電話にも出ず、
朝から酒を飲んだ。

不在着信

四十年以上、
リングで生きてきた人だ。
その光を、文字どおり
俺が奪った。

プルルル



いつまで
落ち込んでる。
次のツアーは
もうすぐだ。
打ち合わせに
来い。



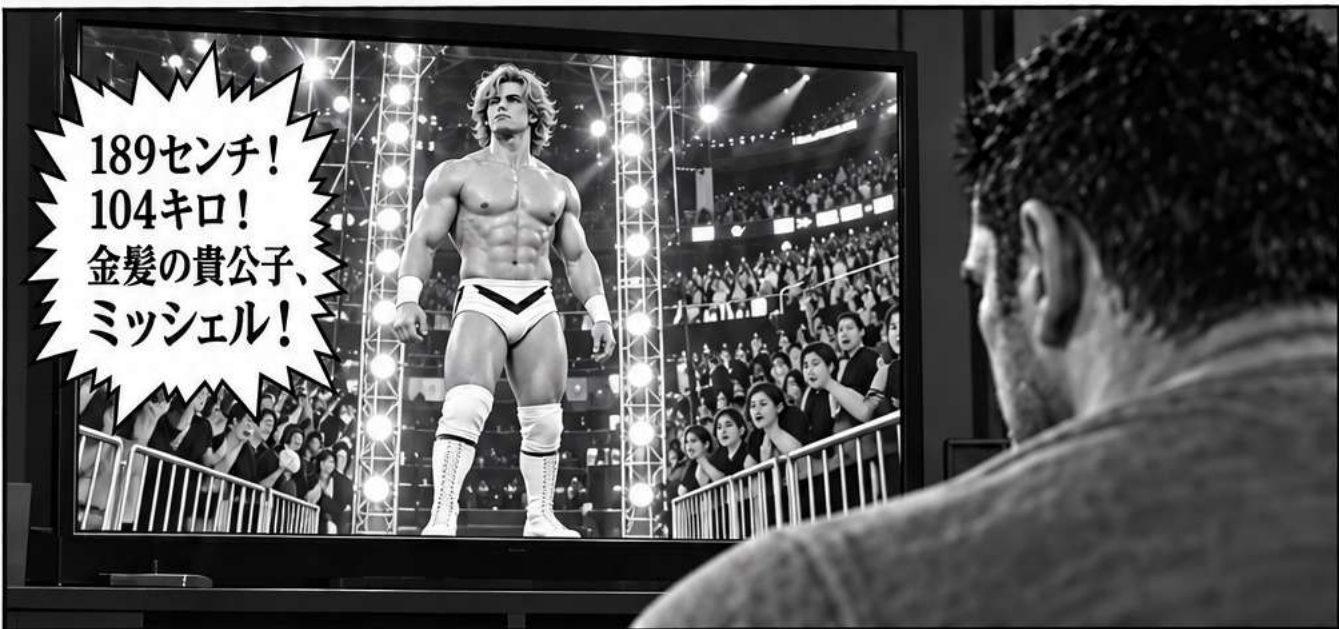
.....
フレッドか。



すまない。
今はそんな気になれない。
次のツアーは、
辞させてくれ。



バカな事を
言うな！
いいからテレビを
つけろ。
今すぐに！



189センチ！
104キロ！
金髪の貴公子、
ミツシエル！



タウンゼントとの
死闘を越えた男が、
帰ってきた!



よかった。
あいつは、
また立ち上がった。



Play The Game!



悔しいが、
フレッドの
読みどおりだ。

前より、
精悍な顔に
なっている。



おい……
待てよ。
嘘だろ?



続きまして!
187センチ!
94キロ!



ザ・キャプテン・
フレディ!!

七つの海を
荒らし回る、
海賊船長!



片目の光は
失っても、
心の光は
失っていなかった。



海賊かよ……。
悪くない。



完



フレッド……
今すぐに行く。